

タガ 日本の縮の緩みの考察

金沢工業大学客員教授
(株)人間と科学の研究所 所長

飛岡 健

はじめに

最近その人数が大きく増加すると共に、様々な国やレベルの人が来日している。そうしたインバウンドの観光客から、日本人は、本シリーズ(1)～(5)で描いた日本文化の優れた価値を、逆に教わっている。こうした多くの外国人の来日する状況に、ノンビリ屋の日本人も目を醒まし始め、徐々に日本人自身が日本についての知識を深める努力をし始めた。それをどのように行えば効果的になるのか?

既に指摘してきたように、その気になれば、沢山の日本(人)研究がなされ、論文や出版物として供されている。それらは少なくとも日本(人)についての現象面や表面的色に関してはかなり詳細に描き出している。その気になればかなりそれから学ぶ事が出来る。しかし、大きな問題が残されている。その問題とは日本(人)論の底流にあるもの、それをここでは基底と読んでいるが、

日本文化とその基底を考える上で基礎知識(一)

- それに関しては研究があるものの、それだけでは十分ではなく、特に日本の歴史の中でどのように、そうした文化とその基底が形成されたのであろうか。その点に関しての掘り下げは不十分である。その指摘に基づき本シリーズ(6)では、定着型の水田稲作農業によって日本文化の重要な部分が形成された事を述べてきた。その作業は、それなりの説明力のある答えが出せたと考えている。
- しかし、その作業をより理解するには、更にそれらのベースとなる人間存在そのものの生存環境との戦いの議論がよりしっかりとなされいる事が必要不可欠である。これまでは、その点を自明のものとして日本文化とその基底に関しての形成のプロセスを論じてきた。そこでその点を捕捉する為の作業を本稿で行っていく。その為に論じる内容は以下の如くである。
- ①人間の心身の構造と機能
—生理、心理、精理(精神)
の三位一体の階層構造—
- 2、環境適応進化論…人間は社会的動物(ポリス的)アリストyles
3、考える葦(ホモ・サピエンス)…言葉を操る生物(認識の発達)、文明、文化の誕生
4、工作人間(ホモ・ファーベル)とルーデンスと文化
5、悩める存在としての遊人(ホモ・星の理解)
6、"水の惑星"としての地球
7、etc.(人間は、人種として存続)
これらの点に関しての深い認識の上に、人間の営為としての文明、文化を考察せねばならない。
- 1、人間の心身の構造(生理—心理—精理(精神)の三位一体の階層構造)と機能
- 何よりも人間の能力を論じる時に、人間の心身は、環境の淘汰圧と自ら考える目標に対し、"変化機能"を内包している点を強く強調しておきたい。そして個々の人間

の変化を通して、種としての変化を取り込み適応していくメカニズムを有している事を把握しておかねばならない。(2)で述べる環境適応が生じ得る背景には、この機能が存在しているから可能となるのである。まさに

ダーウィンの語った如く、強いものが残るではなく、残ったものが強いのである。残る為には変化し、環境の淘汰圧と、自らの精神が定立した目標の実現に向けて適応出来る。

さてその人間の身体は構造的には

図1、機能的には図2で示されている如くであり、それらは生理—心理—精神(精理)の三位一体の重層階層構造として構成されている。その三位一体として変化に対応しているのである。この中で生理(Physiology)と心理(Psychology)とは明確に学問的に定義されているが、精神に關しては、"理"が入っていない。精神病理学(Psychopathology)といふ学問はあるが、生理、心理レベルか概念化が進んでいない。私は精理

という造語を用いる事にしているが、まだ認知を受けていない。

ここでは人間の心身の詳細のシステム(メカニズム・オブ・ファンクション)に関して描く事が目的では無く、

一人ひとりの人間は、人類として、

百数十万年の中、巧みに環境に適応する事によって、60兆個に達する細胞を巧みに構造化し、それらに機能を与え、生存している生き物であり、未だ一定程度の変化をし続けている。そして約100年以

内の中で、誕生—成長—成熟—衰退(病死)—死亡のプロセスを辿り、"生老病死"の苦惱と格闘する生き物である。

②環境適応論と 主体的環境改造論

＜五体による分類＞

頭 部:頭部
胴 体:背 胸 腹 腰
四肢:腕 脚
上下:肢:頭部 背 胸 腹 腕
肢:腰 脚

＜器官上の分類＞

運動器:骨 軟骨 骨格筋 鞘帯
感覚器:目 耳 鼻 舌 皮膚 粘膜 筋紡錘
呼吸器:口 鼻 喉頭 咽頭
循環器:心臓 脾臓 骨髄 血液
消化器:口 喉頭 食道 胃 小腸 大腸 肛門
消火腺
神経系:中枢神経 末梢神経 etc.
生殖器:乳房 卵巣 子宮 etc.
内分泌器:視床下部 下垂体 松果体 甲状腺
副甲状腺 副腎 卵巣 胎盤 精巣

図1 人体の構造

＜人体の機能＞

代謝:体内の化学反応、巨大分子を小分子に小分子を巨大分子に
反応:体内や体外の環境の変化に対する対応
様々な器官を働かせ、ホメオスタシスを安定させる為の仕組み
運動:臓器(胃、心臓、等)や身体(骨、筋)の動き
増殖:増加(細胞の大きさ、数、細胞周りの物質の数)
成長
発生:特徴を持たない細胞から、特徴を持つ細胞へ分化
生殖:遺伝によって新しい個体を作る

図2 人体の機能

宿されているとも言えるであろう。例えば太陽の光の強いところに、棲息する民族は、肌や目が黒くなり、高緯度の寒冷地に生息する民族は、体の熱量を大きくする為に、基礎体温が高く、身体が大きくなつて

ダーウィンの適者生存の進化論を始め、今西錦司氏『棲み分けの理論』等様々な生命の進化、発展に関しての議論はあるが、私は少なくとも人類という生命体は、高度な言語機能を獲得する事によって、自らの与えられた環境の淘汰圧に対し、一つは環境そのものをホモ・ファーベルとして文明の利器(道具)を用いて、改造する事によって、生き易くし、同時に自らの心身の即ち生理—心理—精神を変化せしめる事によって、環境に適応する(Acculturation)能力を培つてきた生きものと捉えている。いや先天的にそうした能力を宿しているとも言えるであろう。

21 ●月刊公論 2018. 9

いつた。日本人は中緯度の温帶モンスーン地帯で、水田稻作農業を生活の糧を生み出す業としているので、肌は黄ばみ、目は黒くなつたし、体の大きさは中程度の大きさで、上半身が農耕作業の為に大きくなつたのであつた。結果として5頭身以下が多い民族であつた。

そうした各々の民族が、各々の棲息の地としての自然環境の淘汰圧に對して、自然と自らの心身の改造によつて、より良い生存の場を獲得してきたことが、人類の歴史であり、民族の歴史であつたし、それは各々の民族の文明、文化の発展の姿そのものである。この視点を人類の営為の様々な姿を理解する“根本原理”である事を了解しておく事が必要不可欠である。

もち論、進化(Entwicklung)という言葉よりも、展開(Entfaltung)という言葉の方が、歴史の理解に必要という議論も一部の学者の間にはあるが、私は一定程度の進化、発達という言葉を用いた方が正しい記述が科学的には出来るであろうと捉えている。

その為には人体の生理的メカニズ

ムとして、この宇宙のあらゆる自然現象が用いられている。

例えば、心臓血管システムの循環系一つとっても、十数kmの長さで、秒速数十cmの速度で數十ミクロンの毛細血管にまで血流を行きわたせる

為に、実に多くの自然現象が取り入れられ、まさに“宇宙の神秘”とも言わねばならぬ位の高度の機能が高度に調和的に組み立てられている。脳システムにしても同様であり、まさに“調和の靈感”とも言うべき絶妙の仕組みが百数十億個の脳細胞を中心に出来上がつていている。知れば知る程その神秘さに驚嘆させられる

現象が用いられている。

従つて、一つの民族や人種を取り上げて、その特定を論じる時には、その民族や人種の生理—心理—精神をしつかりと、環境との関係において把握する事が重要である。結果的にはそれらが各々の民族、人種の文明、文化の形成と深く結びつくのである。

更に次の点が重要である。人類は当初与えられた環境の淘汰圧によって規定され、それに適応する努力をし、環境そのものと自身の心身の改造を行うが、一人ひとりの人間は自己の中に主体性を定立し、新しく目標を定め、それを実現するべく、これまで環境の改良、あるいは人工的環境の創造と、自らの心身の改造を成していく存在であるとの認識を強く持つ事である。人類は受身的に環境変化するのみでなく、能動的に環境操作をしていく存在でもあり、時

る事である。

改めて人間は、生理—心理—精理(精神)の三位一体の重層階層構造として出来ており、環境に三位一体として適応すると共に、自らの心身を変えていく存在である。

③考える葦(ホモ・サピエンス) —言葉を操る生き物—

ように行き過ぎな事がある。ある意味で今日の地球上の姿がそうなりつあるのではなかろうか?



人は、人類がホモ・サピエンスとして“考える力”を高度に宿している事である。もち論、他の生命体には環境との対話をする為のコミュニケーション力としての言葉の十分な発達はないものの、まずは五官の発達と原初的な言葉とそれを組み合わせる知性とが觀察されている。人類として比肩し得るレベルには遙かに達していない。それ故に人類が地球上に良くも悪しきも君臨している。

何よりも、アフリカで誕生した(百数十万年前)とされる人類は、アフリカの草原での生活の必要性から二本足歩行(Bipedalism)をし、前肢を自由にし、手としての発達を遂げ、その動きを高度化すると共に、大脑(Cerebrum)を発達させ、ある瞬間に「ある物とある物とを分離識別する能力」(哲学辞典)としての悟性(ロゴス=Logos)を獲得

した。その瞬間は、それが成立する為に、記憶 (Memory) とそれを脳裡に浮かび上がらせる能力としての

意識 (Consciousness) とを同時に獲得したものと考えられる。記憶がなくとも、意識がなくとも、人間の

脳裡の中で言葉の機能は發揮されないからである。

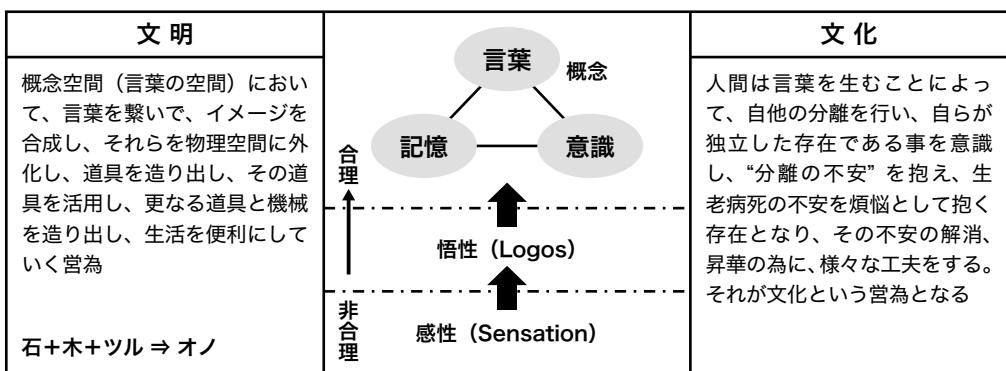


図3 文明と文化

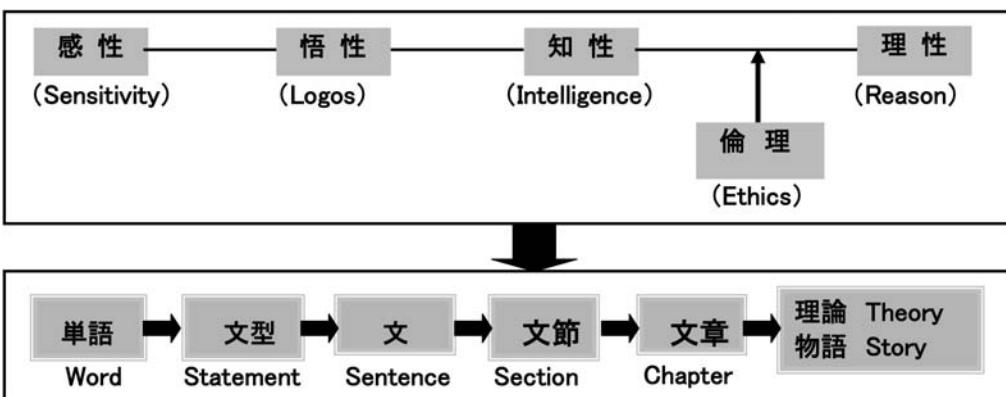


図4 感性から理性へ

しかし、別々に論じる方も多い。それは齊合性がこれなくなるので、私は三者の三位一体としての発生と捉えるべきであろうと考えている。そしてその瞬間から、相補的関係にある文明と文化とを生み落していく事になる。その定義は、図中の両側になされている。今日、この文明、文化の定義が論者の間で確立していないというに課題が残っている。

そして人間は、単語を組み合わせる能力（知性）を獲得し、更に社会的動物（zoon politikon）として、調和の為に倫理（Ethics）という価値を生み、それを知性に適用する事で、理性（Reason）という能力を発達させ社会的秩序（Social order）を保つている。そして作られてる社会は調和的であり、Cosmos（反対語は chaos）

そうした人間の造語能力としての悟性、組み合わせ能力としての知性、更に社会的調和を図る価値観としての倫理と、それを知性に加えた理性とを用いて人間は、図3に示したように文明と文化とを相補的に生み出し展開してきた。既に指摘してきた如く、この文明、文化の定義は論者によってマチマチであると共に、曖昧なまま使用しているケースが多く、混乱を招き易い。一つの参考事例は、『歴史年表』の大分類として文明、文化が用いられている。即ち、図5の如く、文化は更に思想、宗教、芸術に分類されている。

（次号へ続く）



図5 歴史年表